

日本列島 離島巡り

今回は、沖縄本島から東へ360km、太平洋にぽつんと浮かぶ絶海の孤島、南大東島を紹介します。

南大東島は周囲20.8km、火山島ではなく、環礁（輪状のサンゴ礁）が数回の隆起を経てできた世界でも珍しい生き立ちのサンゴの島です。飛行機なら沖縄空港から1時間で行くことができますが、定期船に乗り海路を行くこともできます。南大東島の港は外洋に面した岸壁にあり、うねりが高くて直接接岸できないため、定期船は岸壁から離れたところに係留されます。旅客はゴンドラごとクレーンで吊り上げられて下船するという、13時間の船旅の最後にとても珍しい体験をすることができます。



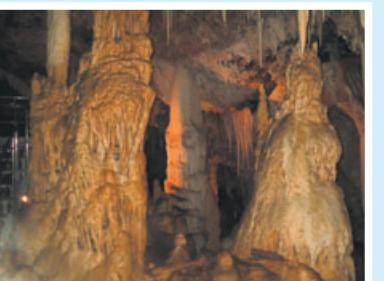
南大東村は明治33年(西暦1900年)に開拓、定住が始まった比較的歴史の浅い島で、特産品はサトウキビです。昭和58年まで、サトウキビや日用品、人も運んでいたシュガートレインと呼ばれる蒸気機関車が走っていました。



村の木に指定されているダイトウビロウは、高さが20mにもなる大東諸島固有種で、無人島時代は島全体に自生していたといわれ、開拓当時から住宅や畜舎などの建築建材や屋根ふきの材料に重宝されました。



数千万年の年月をかけて、太平洋のど真ん中に作り出されたカルスト地形を持つ南大東島ですが、島には120もの鍾乳洞があるといわれています。一番大きい星野洞を訪れる前に、鍾乳洞を完全装備で探検するケイビングツアーを体験するのはいかがでしょう。参加者には、つなぎ、ライト、長靴、タオルを準備してくれるので手ぶらで参加でき、ガイドもつくるので安心です。ツアー目的地である秋葉地底湖の青く澄みきった美しさは、日本でも有数といわれます。島で一番大きい星野洞の広さは約1000坪あり、日本最長170cmのソーダ・ストロー（鍾乳管）や、珍しいぶどう状の鍾乳石が見られます。洞窟内は整備されているので女性でも歩きやすくなっています。



平成12年から「南大東島まるごとミュージアム構想」を進めている南大東島。ダイナミックな自然や開拓時代からの歴史、温かな島の人々との触れ合いが楽しめるでしょう。

ニュースレター等に関するお問い合わせは

公益財団法人 国土地理協会 〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町3番1号
TEL 03-5210-2181 FAX 03-5210-2184
URL <http://www.kokudo.or.jp>

News Letter

'16 Summer 夏号

地名データベースなら
国土地理へ

TEL 03-5210-2181 FAX 03-5210-2184 <http://www.kokudo.or.jp>

Japan Geographic Data Center
公益財団法人
国土地理協会

宮城県「富谷市」平成28年10月10日に誕生

宮城県中部、仙台市の北隣に位置する富谷町が、合併によらない単独での市制移行によって市に昇格し、平成28年10月10日より富谷市（とみやし）となります。ここでは主に人口に焦点を当てて、富谷町の特徴を見ていきたいと思います。

富谷町は仙台のベッドタウンとして発展し、平成27年調査では、国内で人口の最も多い町村となっていました（日本人住民51,702人、二位は広島県府中町51,367人※）。

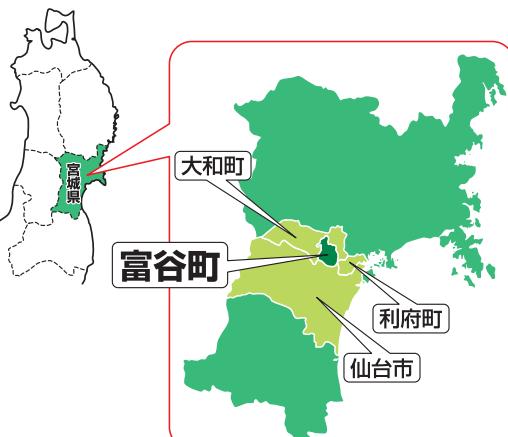
平成の大合併期には仙台市との合併、黒川郡内での合併、単独町制維持などの選択肢が議論されました。がそのころの推計で平成25年には単独市制人口要件の5万人に達すると予測されたため、単独町制を維持して市制を施行する道を選択し、実際に5万人を超えたため市制施行となりました。

ちなみに「とみや」の由来は、町内に10の神社があったため「十宮」と呼んでいたのが、「富谷」と書かれるようになったといわれています。

富谷町の新興住宅地は昭和40年代の東向阳台を皮切りに、国道4号沿いの丘陵地に次々造られ、その面積は市の総面積の18%を占め、造成された新興住宅地に全町民の9割以上が居住しています。平成に入って、将監トンネルの開通、仙台市営地下鉄南北線・泉中央駅開業など、仙台市都心部までの所要時間が大幅に短縮したことも大きく影響しているようです。また、工場集積地（黒川郡大和町・大衡村）への通勤にも便利な立地です。

次に富谷町の人口構成を見てみましょう。年齢3区分別人口について、全国で見ると年少人口（0～14歳）12.93%、生産年齢人口（15～64歳）61.17%、老人人口（65歳～）25.90%ですが、富谷町においては、年少人口18.79%、生産年齢人口64.88%、老人人口16.33%となっており、新興住宅地のため全国的に見ても非常に若い年齢構成となっていることがわかります。

※人口については国土地理協会発行
『平成27年版 住民基本台帳人口要覧』を参照



隣接自治体

仙台市（泉区、宮城野区）

黒川郡：大和町

宮城郡：利府町

ブルーベリー

清酒 鳳陽

富谷もやし

歴史

伊達政宗公の御鷹場があったといわれ、正宗公が可愛がっていた鷹が鷹狩中に死んでしまったために、甕（かめ）に入れて埋葬したという言い伝えのある「甕杉」も存在している。（「亀杉」とも。富谷町鷹乃杜）江戸時代には、奥州街道の宿場として栄えた。

特産品である清酒 鳳陽を作っている内ヶ崎酒造店は、1661年（寛文元年）に仙台藩主から酒の醸造を許され、現役の酒蔵としては宮城県最古といわれている。



全国定住自立圏構想推進シンポジウムin長岡

弊会では、総務省が推進する「定住自立圏構想」についてポータルサイトを開設し(<http://www.kokudo.or.jp/service/teijyu.html>)、その内容と今後の取り組み、並びに関連した情報を紹介しています。今号では、去る1月に新潟県長岡市で開催されました『全国定住自立圏構想推進シンポジウムin長岡』のご紹介をします。

開催報告

- 主 催 総務省、新潟県、長岡市
開催日時 平成28年1月28日(木) 13:30~17:10
開催場所 ホテルニューオータニ長岡 NCホール(新潟県長岡市台町2丁目)
対 象 市町村長、地方自治体職員、定住自立圏取組関係者、地域住民等
参加者数 236人

開催趣旨

総務省では、中心市と近隣市町村が相互に役割分担し、連携・協力することにより、圏域全体として必要な生活機能を確保する「定住自立圏構想」を推進しています。今回は、定住自立圏における最新の動向を紹介するとともに、先進事例や課題の共有を行うことにより、全国の取組へと展開していくことを目的として開催しました。

シンポジウムスケジュール

13:30~ 開会、主催者挨拶

基調講演「定住自立圏形成によるマネジメント能力の強化」

講演者:早稲田大学政治経済学術院教授 稲継 裕昭 氏

取組事例報告「ふるさとで暮らし続ける～長岡地域定住自立圏の取り組み～」

報告者:長岡市長 森 民夫 氏

総務省報告「定住自立圏構想の全国の状況について」

報告者:総務省地域力創造グループ地域自立応援課長 黒瀬 敏文 氏

パネルディスカッション「定住につながる地域の魅力づくり」

パネリスト:稻垣 文彦 氏 公益社団法人中越防災安全推進機構
(五十音順) 震災アーカイブス・メモリアルセンター長

佐藤 一絵 氏 農林水産省経営局就農・女性課 女性活躍推進室長

澤田 雅浩 氏 長岡造形大学准教授

須永 珠代 氏 株式会社トラストバンク代表取締役社長

高橋 菜里 氏 NPO法人プロジェクト88理事長

森 民夫 氏 長岡市長

コメンテーター:稻継 裕昭 氏 早稲田大学政治経済学術院教授

コーディネーター:黒瀬 敏文 氏 総務省地域力創造グループ地域自立応援課長

※シンポジウム終了後、交流会を開催

※二日目は長岡市内視察(アオーレ長岡など)

全国定住自立圏構想推進シンポジウムin長岡の結果概要

基調講演

早稲田大学教授 稲継裕昭氏「定住自立圏形成によるマネジメント能力の強化」

定住自立圏は他の自治体や民間組織について学ぶ絶好の機会である。職員の相互派遣あるいは圏域内の日常的な交流が人を育てる鍵となり、公会計制度をはじめとした制度や書式等を圏域で統一することにより、お互いに学び合い・助け合いが可能となる。また、地域おこし協力隊など地域民間人材の協働や域外との連結が可能な創造的人材の定住・交流促進も重要である。人事交流・人と人のふれあい・連携による圏域マネジメント能力の強化が、圏域づくり・まちづくりに欠かせない。

取組事例報告

長岡市長 森 民夫氏「ふるさとで暮らし続ける～長岡地域定住自立圏の取り組み～」

長岡地域定住自立圏では、休日夜間救急医療、バイオガス発電、公共施設の相互利用などに圏域一体となって取り組んでいる。中越地震の教訓を活かした中越防災安全大学の事業は、市民防災力の強化のために民間の中に防災士を育てる取組であるが、長岡市単独で実施していたものが、定住自立圏をきっかけに圏域全体に広がり、卒業生は500名を超え、現在では圏域を越えた活動に発展している。定住自立圏は、行政の枠組みを越え、住民の生活や経済活動を支えるようになったとき、初めて意味のあるものになると感じている。

パネルディスカッション

「定住につながる地域の魅力づくり」(以下パネリスト五十音順)

●稻垣文彦氏 公益社団法人中越防災安全推進機構 震災アーカイブス・メモリアルセンター長

地域が差別化・商品化を図るには、自ら「地域磨き」あるいは「価値を見つける物差し探し」を継続すること、行政はその戦略を立てることが重要。地域と行政をつなぐには、民間組織を活用することが効果的であり、その結果、定住や6次産業化へとつながっていく。

●佐藤一絵氏 農林水産省経営局就農・女性課 女性活躍推進室長

就農の多様化が進む中、農水省では、女性の就農支援制度を増やしているところ。ただ、日本社会では女性は結婚、出産などライフプロセスで選択を迫られる部分が多いため、それらを克服できる環境づくりに行政が携わることが効果的。

●澤田雅浩氏 長岡造形大学准教授

地域の新しい可能性を引き出すためには、前例にとらわれず規制緩和をして、実験的にやってみることが必要。他市町村や民間組織との連携もその1つであり、定住自立圏構想はそのきっかけとなり得る枠組みである。

●須永珠代氏 株式会社トラストバンク 代表取締役社長

地域はふるさと納税を通じて、資源を発掘し、キュレーションし、PRする力をつけてきている。小さな成功を積み重ねることで、大きな市場が生まれ、大きな情熱が生まれる。このことが、地域のやる気につながり、いろいろな知恵を引き出せるようになる。

●高橋菜里氏 NPO法人プロジェクト88理事長

地域に外から入ってきた人間が受け入れてもらうためには、相当な時間が必要。地元で活躍している企業に相談し、連携を図って、徐々に理解を深めてもらうことが、地域での活躍につながる。

●森 民夫氏 長岡市長

もともと地域にはいろいろな魅力があるということに気づくことが大切。自分の価値観の物差しを変えれば、思いがけないものが魅力になるということを自覚するだけで、世界が広がる。